淑徳大学広報
http://www.shukutoku.ac.jp

# Together

2011.10.1

2011 Autumn
Shukutoku University No. 188

■No.188 の Cover People
【2010 年度卒業生の皆さん】
7月に国際コミュニケーション学部ではホームカミングデーを看護学部では卒業生の集いを開催しました。震災により卒業式が中止になったため、2010年度卒業生が一同に会しました。再会を喜ぶ声がキャンパスにあふれました。社会人として新たな道を歩き始めた卒業生を、いつまでも母校は応援しています。

P02 ＞ 特集
一人ひとりの思いを実践しよう
## 利他社会へ歩みだそう

P09 ＞ 川越市長、三芳町長と学長が対談
## 新設「経営学部」に地元も期待 一層の連携を確認

P 01 TOPICS
卒業生が各キャンパスに集いました。
東日本大震災支援ボランティアの展開

P 02 一季一言
感恩から生れる利他の実践

P 10 クラブプレス

P 13 NEWS CLIP

P11 ＞ 活躍する淑徳人
「やってみると未来が見えたり、開けたりする」
株式会社ホテルオークラ東京ベイ　小川 裕樹 さん

SHUKUTOKU

# 「利他」それぞれの実践。

## 実践 02 ソーシャルワーカー

### 葛藤の中で気づいた自分らしい利他の実践・表現のやり方

「母子指導員」の仕事では、ときには毅然とした態度で接することが求められます。そんな役割に縛られた自分を不自由に感じたこともありました。しかし、支援するやり方・表現の仕方はそれぞれ自分らしいアプローチがあることに気づき、乗り越えることができました。

私が心がけているのは、困難な状況に陥っているお母さんの気持ちをまず聴き受け止めること。そして「〜してはいけない」ではなく「〜したほうが楽になりますよ」と受け入れやすく、なおかつ自分も伝えやすい支援や表現の仕方を工夫すること。そうしたことの結果なのか、利用者の方から名指しで呼ばれ、長い時間、不安や悩みを聞く時間も増えてきました。

お母さんはこどものことが最優先でいわば利他心の象徴です。その利他の心が持続できるようにお母さんにアドバイスしています。お互いが自分らしくあってこそ本当に利他が実践できるのではないでしょうか。

●青柳 麻子さん
社会福祉学科卒業。社会福祉法人大洋社 大田区立ひまわり苑 勤務。

## 実践 03 障がい児教育

### 一人ひとり、それぞれの世界で輝くこどもたち

淑徳大学発達臨床研究センターは、発達につまずきを示すこどもの治療教育施設です。現在、千葉市を中心とする約30名のこどもたちが、週2日の治療教育を受けています。

発達に障がいのあるこどもは、それぞれ自分なりの理解の仕方、"原則"を持っています。「こどもはこうあるべき」といった常識でとらえることはできません。例えば、ものを投げてしまうようなこどもでも、よく観察してみると投げるものと投げないものがあります。投げてぶつかったときの音を楽しんでいて、いい音がするものを投げているようなのです。

こどもの世界をより深く知ることで、障がいというネガティブな言葉が「こんなこともできる、あんなこともできる」とポジティブなものに変わっていきます。こどもはそれぞれのやり方で私たちのために利他のサインを発信してくれているのです。

●池畑 美恵子助教
社会福祉学科卒業。大学院社会福祉学研究科博士課程修了。淑徳大学発達臨床研究センター助教。臨床発達心理士。

## 実践 04 社会からのメッセージ 地域・コミュニティ

### 「利他」は人が本来あるべき姿 それが孤独死ゼロにつながる

孤独死に至る人は、多くの場合、挨拶をしない、会話をしない、身内と連絡をとらない、友達がいないという「ないないづくし」の生活を送っています。こうしたことから、「あいさつ運動」や住民同士の交流の場となる「いきいきサロン」を始めました。孤独死を防止するうえで一番大事なことは、人が本来持つべき社会とのつながりを取り戻すことです。

自分は自分で、どう勝手に生きようと、何をしようと指図されることはないと思う人もいるでしょう。しかし、現実には家族や仲間に支えられて生きています。人を大事にすることは、結局は自分を大切にすることにつながってくるのです。孤独死防止運動は、言いかえれば良い生き方をしようと呼びかける運動だと思っています。

●中沢卓実氏
本学特別招聘教授。常盤平団地（千葉県松戸市）自治会長として長年にわたり「孤独死ゼロ作戦」を推進。

## 実践 05 看護

### 患者さま、こどもたちに教えられ、成長している日々

●穴水千尋さん　看護学科卒業（一期生）。東邦大学医療センター佐倉病院勤務。

忙しい医師を前に、患者さまやご家族が直接聞きづらいことがあります。例えば、いつお粥から米飯に変えてもらえるのかとか、さっぱりしたいのでシャワーを浴びていいかといったような質問や要望です。小さなことかもしれませんが、患者さまの生活の質をあげる上で大切なことだと思います。そんなときは、看護師が代わりに医師に確認し、許可が出れば対応するようにします。そういうことを一つひとつクリアしていくと、次はここを気をつけようと今までより広い視点から患者さまのことを見られるようになります。患者さまのことを第一に考えつつ、それが自分の経験につながっている実感があります。

●伊野美由紀さん
看護学科卒業（一期生）。千葉県立こども病院勤務。

病院には、生まれてからずっと入院していたり、学校に行くことができないこどもたちがいます。こどもが好きというだけでは務まらない仕事です。どうしたら治療が受けやすいか、こどもたちの生活がよくなるかをいつも考えながら行動しています。大学時代の実習中では、もっと技術やコミュニケーション力があればこどもたちの状態が良くなるだろうにと泣きたくなるほど悔しい思いをしたこともありました。それでも、絶対に小児科に行きたいと思い、千葉県立こども病院を選びました。まだ新米の私でも必要としてくれることもたちがいて、母校には悩みを聞いてくれる先生や仲間がいます。皆に支えられている私はとても幸せです。

## 実践 06 介護旅行

会社訪問してきました！

### 介護旅行の第一人者として活躍する篠塚恭一さんのもとを文化コミュニケーション学科観光文化コース2年小澤えりなさんと河合美波さんが訪れ、話を聞きました。

私は介護旅行と聞いて、バリアフリーの設備が整った範囲で旅行に付き添うものだと思っていました。しかし、篠塚さんは「車椅子で行けるところではなく、行きたいところにどうしたら車椅子で行けるかを考える」とおっしゃいます。お金をかけて設備を整えたり、制度ばかりに気を取られたりするのではなく、一人ひとりの支え、つまり共生の精神が大切であることがよくわかりました。

小澤えりな（埼玉県立大宮南高校出身）

「自分でスーツケースを持てなくなったら旅行をやめてしまう」。お年寄りからのひと言がきっかけで、篠塚さんは介護旅行を考えるようになったそうです。

お話しを聞いていて「好きな旅行を続けて欲しい」と願う気持ちがとても伝わってきました。お会いするまでは、介護旅行はすごく大変な仕事だと思っていました。でも、人の生きがいにかかわれること、旅に出ることでその人の気持ちや暮らしまで変えてしまうことがわかり、とても素晴らしい仕事であると考えを新たにしました。楽しいことのほうが多いという言葉がとても印象に残っています。

河合美波（山村国際高校出身）

写真左より、河合美波さん、篠塚恭一氏、小澤えりなさん

### お客様の生きがいを支える仕事 感謝の言葉で自分たちも変わってくる

介護旅行では、旅行中のお世話はもちろん、出かけることを諦めているお客様に、「行ってみよう」と前向きな気持ちになっていただくことが重要になります。旅を経験すると、それがきっかけで日常生活も変わります。来年の旅行に向かって、リハビリを一生懸命頑張るようになった、食事制限を守るようになったという声を聞くととてもうれしいです。

介護旅行を支えるプロが「トラベルヘルパー（外出支援専門員）®」です。はじめは緊張で固くなっていたヘルパーたちの表情が、働くうちにどんどん変わってきます。お客様から好かれ、ご家族からも頼られ、感謝され、それを繰り返していくうちに、生き生きとしてくる。そんなとき、「利他」の心を実感します。

観光も福祉も人を幸せにする仕事という原点は同じです。介護旅行はお客様と深くかかわり、自分の視野も広げることができる素晴らしい仕事だと思います。

篠塚恭一氏
（株）エス・ピー・アイ代表取締役。高齢者や障がい者の快適で活動的な日常生活を支援するための会員組織「あ・える倶楽部」を主宰。NPO日本トラベルヘルパー協会理事長。